

# 台湾のアスパラガス栽培

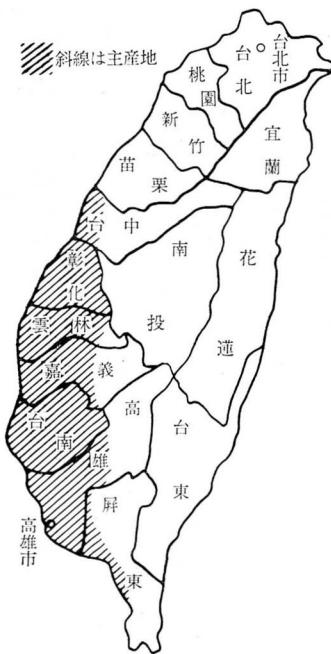
北海製罐株式会社  
山本茂雄

表-1 台湾アスパラガス罐詰生産量及び輸出数量、金額

単位標準函、ドル

| 年次   | 生産量       | 輸出数量      | 金額         |
|------|-----------|-----------|------------|
| 1963 | 1,639     | 335       | 4,355      |
| 1964 | 61,034    | 33,244    | 410,952    |
| 1965 | 999,694   | 801,039   | 11,047,654 |
| 1966 | 1,620,122 | 916,328   | 14,218,221 |
| 1967 | 1,638,317 | 1,744,509 | 23,956,381 |

図-1 アスパラガス栽培地



(5) 収穫 標準 北部 定植後八カ月目から  
南部 定植後六カ月目から

日本のアスパラガス、特に北海道のアスパラガスは、その柔らかさ、香味が、高級な食品として国内外で賞味されております。世界で最大の生産国はアメリカで、特にカリフォルニアが有名ですが、近年は収穫労力の面から減少しております。日本でもところが数年前から、台湾で栽培が始まられ、伸長著しく、現在ではその罐詰は、西

カリフオルニヤが有名ですが、近年は収穫労力の面から減少しております。日本でも同様な理由から伸び悩みとなっております。

今春機会を得て、台湾のアスパラガス栽培を見ることが出来ましたので、ここでその概略について触れてみたいと存じます。

## 一、栽培地及び面積

栽培地は台北から高雄、屏東に至る台湾西部の平野部に広くわたっていますが、台中、彰化、雲林、嘉義、屏東各県が主産地となっており、東部の花蓮、台東県等は罐詰工場の少ないこともあって、栽培は多く

栽培地の土壤は河川流域、或いは海岸に近い砂質土壤が多いが、中にはやや重粘がかたったところでも行なわれております。最近栽培が盛んとなって来ている屏東県は甘藷、甘藷以外作られなかつた砂質土壤地帯が中心となっております。

面積は表二のとおりですが、一九六八年には罐詰価格の暴落もあつて大幅に減反し、本年春にはやや回復したものの約五、六〇ヘクタールであります。

### (4) 施肥量

標準(一〇kg当たり要素量)

窒素 六〇~一〇〇kg  
二〇~三〇kg  
四〇~五〇kg  
カリ  
磷酸

追肥は三回程度、株の近く一二糞の深さに穴をあけて施す。一般農家は原料価格によつて施肥量を多くしたり、また少なくしたり、時によつて無肥料の場合もありま

表-2 台湾アスパラガス収穫面積及び生産量

| 年次   | 収穫面積  | 生産量    | 内罐詰向原料 |
|------|-------|--------|--------|
| 1963 | 105   | 441    | 400    |
| 1964 | 400   | 1,950  | 1,500  |
| 1965 | 3,850 | 23,870 | 23,000 |
| 1966 | 6,450 | 41,925 | 38,500 |
| 1967 | 8,560 | 41,088 | 38,100 |

- (1) 品種  
メリーワンントン、カリフォルニヤ五〇、UC六六等が用いられていますが、農業改良場の試験結果から最近はメリーワンントン三〇九が奨励されております。  
(2) 育苗  
標準としては次のとおりです。  
春播 播種三月中旬~四月上旬。播種後三ヵ月で掘取、定植。  
秋播 播種一〇月までに。播種後五ヵ月で掘取、定植。

○○○糸程度と推定されます。

## 二、栽培法

台中地区で見た農家では、一月に播種し、五月に定植予定とのことであり、また二月に定植した畑は六月から収穫開始予定とのことでした。

収穫期間は一八〇日間程度であり、当初は七月八月の高温期には収穫を休んでいましたが、台北区農業改良場の試験結果から継続収穫しても影響ないことが判り、本年からは三月下旬から十一月末まで引き収穫するようになると思われます。収量は百八〇日間収穫で平均六ト／翁で最高八ト／翁程度であります。

台湾では日本、アメリカ等と異なり、収穫期間中も茎葉を繁茂させております。母茎を残すと「茎葉によって地面への直射を防ぎ、地温の上昇を妨げる」とを目的としております。

同化作用をさせることと、茎葉によって地面への直射を防ぎ、地温の上昇を妨げることを目的としております。

母茎を残す場合、その本数の標準は次のとおりです。

|    |      |
|----|------|
| 北部 | 三~四本 |
| 南部 | 四~五本 |

(北大での試験では北海道でこの方法を行なうことは逆の結果となります)

(6) 栽植年限

一般的には五六年、生育、管理の良い畑で六七年と見られています。

(7) 病虫害

台北区農業改良場では台湾におけるアスパラガス病虫害として次のものを挙げております。

(イ) 茎枯病  
(ロ) ワタフキムシ  
(ハ) ヨトウムシ

図-2 収穫中のアスパラガス畠

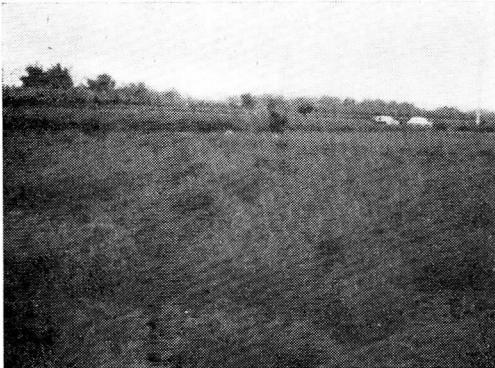
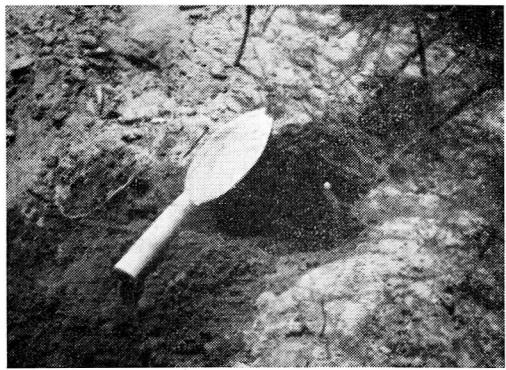


図-3 台湾の収穫用ナイフ



は見当たりませんでした。しかし苗圃には北海道と同様褐斑病の著しく発生しているところがあり、また収穫中の畑にヨトウムシの食害が見られるところが散見されました。

### 三、原料規格

一等 長さ一七秀筋 径一五ミリ以上  
二等 長さ一七秀筋 径一一~一三秀筋  
着色頭部より五秀筋以上は格外

しかし、現在検査場に出されるものではなく、規格は無くに等しく、乱れており、長さ三〇秀筋近い原料を買入れているところもあり、整理されているところでも二二秀筋の長さで買入れております。

### 四、原料価格

標準価格として打出された価格はキログラム当たり

一等 一二新台湾ドル(一〇八円)  
二等 一〇新台湾ドル(九〇円)

現実には規格も正常でなく、価格もまた一様ではありませんでした。地区によって変動はありますが四月上旬の取引価格は二二秀筋の長さで工場渡し九一一新台湾ドル(八一~一〇〇円)の範囲であります。

一九六八年は一〇八円~一四四円平均一三五円でしたが、七月八月は大半の工場が製造を休止したため、その期間出荷された原料は三六~四五円で取引されたとのことです。

図-4 収穫中の畠  
(母茎を残している、手をかける農家は先端を摘んでいる)



### 五、集出荷

農家→農会→検査場→工場  
す。  
政府の指導は次のようになっておりま

検収場は農会と工場から受入検査員が出ていて、手数料は、二・七円／キロ、これは昨年まで会社負担であったが本年より農家負担となりました。

しかし、四月上旬はシーズン始めということもあって、この方式では行なわれてなく、六月頃からになるだろうとのこと、現在は次の方法で行なわれております。

(2) 農家→小ブローカー→大ブローカー→工場

小ブローカーは大体一〇戸前後の農家のものを集め、大ブローカーに渡し、大ブローカーは工場に連絡して価格の高いところへ運ぶという順になります。

運搬は五〇キロに入る竹籠が使われていますが、その輸送距離は二〇〇～二五〇キロ、時に三〇〇キロ以上になることもあります。氷も使用せず、鮮度低下は免れないと推定されます。

## 六、生産費

屏東県新園郡の優良農家では生産費として七二、〇〇〇円／一〇ヘクタールを要し、そのうち肥料代として三六、〇〇〇円／一〇ヘクタールである。收量は一七磅規格で平均六〇〇キロ／一〇ヘクタール、従って原料の生産コストは一〇円／キロとなりますが、規格が乱れており、收量は大幅に上がっていて、昨年、二七～三六万円／一〇ヘクタールの粗収入を得た農家が多く、他作物と比較して非常に有利であるという話でした。

以上、台湾のアスパラガス栽培の概略を述べましたが、北海道と比較してみますと

大きな違いに気がつくことでしょう。

(1) 北海道では播種後収穫までに三年かかるのが、一年間で収穫可能のこと。

(2) 北海道では五月初、中旬から七月下旬まで、七〇日前後の収穫期間が、台湾では四月から十一月末まで一八〇日間から、ところにより二七〇日間と長いこと。

(3) 台湾では母茎を残すことで、収穫中も地上に茎葉を伸長させています。

アメリカ、日本その他の国々の栽培法と全く異なります。

この中で(1)、(2)の点は暖地での有利な点と思われます。人件費が安い点もまたアスペラガス産業にとって恵まれた条件といえましょう。また勤勉な農家の多いことも更にプラスされる原因でしょう。

反面、収穫時間が長いのに比し、収量が余り多くない、収穫物の品質は繊維が多く剥皮しなければならない（これにより二〇%のロスが出ます）等の不利な点があります。

香味があり、また柔らかく、優れた品質を誇る北海道のアスパラガスが、台湾産と対抗していくには、生産性の向上、反収の増加を期することが最も重要なことといえます。

これには適切な施肥と共に、品種改良によって品種の更新を進めることが解決の途であり、北大、国立、道立農業試験場、その他関係機関の努力によってこの途は開けつつあります。

## 日本草地学会 秋季大会 第十八回発表会

## 地元高知大学農学部のお世話で、農協会館を中心を開催されました。

まず第一日目のシンポジウムについては四国の地形の特徴として、山地をいかに生産的に利用すべきかという点に要約され、五名の講師より、山地に対する草地改良と草地管理について説明がありました。大草が、大部分は急傾斜の山地が多くまた民有地が混在している点などで機械化作業は実施しにくいのが現状です。しかしながらここに大きな光明を見出したのは、高知市円行寺で酪農経営をしておられる岡崎正英氏の山地酪農であります。これは本誌二月号に記されていますが、山道を作る以外は殆ど機械力を使わず、畜産の足で敷を拓き、表土の薄い岩盤の急傾地は開墾することなく、在来のシバを利用し、徐々にではあるが、全く着実に、百年経つても太れない雑木の藪を年間二メートル以上の放牧地に改良見学で実際に見せていただいたので改めて感じ入った次第であります。

一般研究発表は九つの部門に分れ七六題の発表がありました。特に最近暖地牧草として注目を集めているパニックグラスについて中心的研究を進めておられる、農林省四國農業試験場の研究成果を一部掲載させていただいて紹介いたします。

パニック類はサトウキビなどと同じ仲間であります。が、丈がソルゴーやデントコーンのように伸びるものばかりでなく、ロンググラス程度の草勢で再生力の旺盛なタイプもあります。

四國農試ではギニアグラス、バルブペニク、カラードギニアグラス等一年生とその他のブルーペニク、スイッチグラスなど多年生についてもそれぞれ調査研究中であります。が、このうちカラードギニアグラスは有望な暖地牧草であり、その特性としては、下部葉鞘が紫褐色をおび、初期生育が早く、草丈は一筋五〇～二筋に達し、茎は細く扁平で、分けつも多く、一株で數十本から一〇〇本にも達します。また再生力強く七月～十月にかけて四～六回の刈取りを行なうことが出来ます。

乾燥に強く、強稈で耐肥性があり、多肥によつて著しく増収し、嗜好性もよい（これがローズグラスとの一大相違点です）。一〇坪当たり播種量は一・〇キロ、播種期は五月月中旬播種が適当ですが、播種期の幅は比較的広いので作り易い新作物です。

これらのパニックグラス類については、一部を発売することになっております。